

ニューヨークにおける ラディカルフェミニズムの運動と思想

栗原涼子

はじめに

1960年代、とりわけ1967年から1968年にかけては、公民権運動、ヴェトナム反戦運動、学生運動からラディカルフェミニズムの運動が誕生したときとして注目される。また、1968年はラディカルフェミニストが「平和のための女性ストライキ」(Women Strike for Peace 略称 WSP) グループに「母であることは即、反戦の理由とはならない」として対抗し、「ヴェトナムよりむしろ女性の抑圧を考えるととき」であるとしたことにおいても重要な年である。

ラディカルフェミニズムの運動は1967年頃に発生し、1973年頃にかけてアメリカ各地で発展し、全米女性機構(National Organization for Women 略称 NOW 1966年設立)を中心としたリベラルフェミニズムの運動とともに第二波フェミニズム運動を形成した。ラディカルフェミニストたちは、リベラルフェミニストたちのように男性と平等な権利獲得を求めるよりむしろ、セクシュアリティを言挙げした。彼女たちの多くは、性の解放を主張するのではなく、性がいかに搾取され、抑圧されているのかを問題化した。運動の初期には、ラディカルフェミニストたちは、アフリカ系アメリカ人女性とともに、人種主義にも対抗したが、白人女性たちは1970年頃になると、女性の抑圧はあらゆる人種、階級を超えるとして、女性間の差異を否定し、人種問題を放棄した。さらに、ラディカルフェミニズムは異性愛システムを女性抑圧の元凶とし、1970年代にはレズビアンズムを巡り、論争を紛糾させた。一方、出発当初は、新左翼による学生運動からの影響を受け、階級闘争をめざしていたラディカルフェミニストたちからしだいにマルクス主義的階級意識は消え、女性こそが唯一の抑圧された階級とする視点が強まった。

現在までの主要な1960年代研究は女性を登場させていても、脇役として扱っていることは否めない。他方、1970年代以降の女性史研究者の多くが第二波フェミニズム運動の当事者であり、研究対象としては主に第一波フェミニズム運動を中心課題としたため、第二波フェミニズム運動の理論書は書かれたが、歴史研究書は少なかった。アリス・エコルズ(Alice Echols)は1989年に*Daring to Be Bad: Radical Feminism in America 1967-1975*を、続く2002年に*Shaky Ground: The Sixties and Its Aftershocks*を著し、ラディカルフェミニズムに関する歴史研究を事実上スタートさせた。¹彼女の著作は運動当事者への膨大なインタビューに基づき、ラディカルフェミニストたちがいかにして新左翼の男性の運動から独立した女性解放運動を生み出したかを詳細に論じている。近年、ラディカルフェミニズムに関する資料のアンソロジーも出版され、運動を再考する動きは高まっている。²エコルズが1960年代研究の視点から、ラディカルフェミニストと新左翼の関係をより密接なものと描いているのに対し、本稿はむしろフェミニズム運動史の視点から、ラディカルフェミニズムの運動が出発点からNOWのリベラルフェミニズムの運動と対抗しながらも、協力した点を重視する。ま

た、リベラルフェミニズムが1975年以降にラディカルフェミニズムの思想や価値観を吸収し、幅を広げたとする従来の研究に対しては、ラディカルフェミニズムが残した遺産が現在まで少なからず継承されている点を明らかにする。

1, ニューヨークラディカルウイメン (New York Radical Women)

ニューヨークラディカルウイメンは1967年10月にパム・アレン (Pam Allen) とシュラミス・ファイアストーン (Shulamith Firestone) により結成された。ニューヨークのフェミニストたちは、ワシントン D.C. やシカゴのフェミニストたちと比較すると、新左翼の説くマルクス主義的解放を主張するよりもむしろ、男性から独立して女性の問題を第一とした点が特徴であるが、組織内部には階級闘争を重視する新左翼寄りの女性もいた。1968年1月15日、ワシントン D.C. においてランキン平和行進が行われたが、「平和のための女性ストライキ」に所属する女性平和運動家がジャンネット・ランキン (Jeannette Rankin) を行進の先頭に指揮したこのヴェトナム戦争反対行進に、リベラルフェミニスト、ラディカルフェミニストなど5000名が参加した。87歳のランキンとコレッタ・スコット・キング (Coretta Scott King) が連邦議会に声明文を届けた。ニューヨークラディカルウイメンはシカゴのラディカルフェミニストたちとともに、行進のリベラルな性格を批判し、女性初の行進が平和運動行進となれば、女性解放の視点を見失うとした。彼女たちは、ランキン平和行進を、「古典的な方法で伝統的な女性の役割を演じた。彼女たちは、妻として、母として、喪に服する人としてここにやって来た。女性として、弱さと政治的無能力と涙に象徴される女性らしさの定義を変更するために組織するのではなく、男性の行動に涙する受け身の行為者としてやって来たのである」と述べた。さらに、この行進が連邦議会への反戦表明であったことを問題視し、ラディカルな女性たちが求めたのは、「連邦議会にアピールすることではなく、むしろ、このような大規模な集まりは真の政治力を構築する手段を考案するために使われなければならない」とした。³ 彼女たちは政権批判として、アーリントン墓地で、「伝統的な女性らしさ」を葬る行進を行った。ランキン平和行進は女性たちを繋ぐ役割を果たしたが、ラディカルフェミニスト対平和運動家の女性という対立の構図が生まれた。これを機にファイアストーンとキャシー・サラチャイルド (Kathie Sarachild) はラディカルフェミニズムの運動を独立させようとした。⁴

ニューヨークラディカルウイメンは開かれたグループであった。創設時の会合には常時30名程度の出席者がいたという。ピーク時の1968年秋の会合にはおよそ100名の参加者がいたと言われている。キャシー・サラチャイルド、ロビン・モーガン (Robin Morgan)、ケイト・ミレット (Kate Millett)、エレン・ウィルズ (Ellen Willis) などが主要な会員であった。一方、組織は常に対立の火種を抱えていた。パム・アレンはとくに会の方針をめぐって他の女性たちと対決姿勢を強めたという。ロス・バクサンダル (Ros Baxandall) (バクサンダルは彼女の夫の姓であったので、現在彼女は姓をXと名のる) は、この組織を新左翼から独立した女性の運動として確立するために、アレンと対立した。一方、「男性支配」を説く理論と男性との個人的な関係を持つ現実との間の矛盾は解消されなかった。結果、男性を排除せず、男性とともに「男性支配」と闘うという理論も構築された。組織は緩やかな結びつきで成立し、新左翼との関係も深く、男性嫌悪主義、レズビアン分離主義を採らず、結婚も問題としなかった。サラチャイルドは結婚のほうが自由恋愛より女性にとって有利であるとも述べている。組織は、異性愛を「自然なもの」としたが、意識覚醒 (Consciousness-Raising 略称 CR) を女性

解放のための政治的な武器とし、新左翼の運動との違いを浮き彫りにしようとした。

組織が分裂する過程には二つの分節点があった。まず、第一の分節点は1968年9月7日の「ミスアメリカコンテスト」であった。新しい会員のロビン・モーガンがアトランティックシティで開催されたミスコンテスト反対を指揮した。メディアが初めて大々的にラディカルフェミニストの行動を報じたのはこのときであった。フェミニストたちは、男性のレポーターからのインタビューを拒否した。メディアは「ブラバーニング」をまことしやかに報じたが、実際には会場となったアトランティックシティの法律で物を燃やすことが禁じられていたためフェミニストたちはこれを行っていない。女性たちはブラバーニングではなく、ゴミ箱に女性らしさを象徴するものを放り投げた。⁵ モーガンは、男性支配の象徴としてミスアメリカコンテストを批判した。一方、ミスアメリカコンテストは組織内部をCR重視のフェミニストと、敵は男性ではなく企業文化であると企業を告発する新左翼寄りのフェミニストとに分裂させた。キャロル・ハニッシュ (Carol Hanisch) は、ミスコンテストにおける女性らしさを否定する主張は、「美しい女性」を敵にまわすことになり生産的ではないとし、男性記者に応答しないなどのアクションも効果的ではないばかりかむしろ「女性の日々の生活こそが歩くミスコンテストである」から、男性にも語りかけるべきであると論じた。⁶ 1968年の会合では、女性解放の中には、必然的に経済の社会化も含まれ、女性解放こそが、資本制、家族、個々人の関係を変革するプロジェクトであるとの指摘がなされた。しかし、時を追うにつれ、フェミニストたちは、資本制と女性解放とは無関係であるとの認識を深めていった。サラチャイルドとハニッシュは、CRが社会変革のツールであると考え、行動はCRの後に来るものであると論じた路線を容認した。会員の中に、新左翼の階級重視の視点に対抗し、女性重視を説くプロウーマンラインが登場した。このときに、男性と異性愛と結婚を否定せず、男性の参加も否定しなかった初期のラディカルフェミニズム組織のあり方から、セクシュアリティを問題化し、リーダーシップを否定し、人種、階級問題の上に男性支配を置く視座が生まれた。

1968年12月にニューヨーク市で開催された民主社会のための学生連合 (Student for Democratic Society 略称 SDS) の会議において、ノエル・イグネイション (Noel Ignation) が、女性解放の問題を提起した。しかし、彼は第一義的問題をあくまでも支配階級による労働者階級の抑圧であるとし、人種問題、ジェンダー問題は第二義的なものであると規定した。労働者階級の問題を解決することにより、第二義的な問題は自動的に解決されるとしたのである。参加した多くの女性たちは、これに対し、歴史的に社会主義革命によって女性の問題は解決されなかったと反論し、「男性支配」 (male supremacy) という語句を用い、男性が社会におけるあらゆる場で、優位な地位を得ていると告発した。女性たちは、女性による新たな計画案を策定した。その第一に、「男性支配」と女性抑圧の物理的な根拠の分析、第二に、SDS内部での男性支配の根絶が掲げられた。その中には、大学における男女平等賃金、教育における機会均等、労働者階級の女性解放の実現などが含まれた。「もし社会主義革命を唱道するならば、私たち女性の声に耳を傾けなければならない」と彼女たちは説いた。⁷

ミスコンテスト批判に続く第二の分節点が、このSDS大会を挟む1968年11月、1969年1月の新左翼による大統領就任に反対する動きへのフェミニストたちの抗議であった。この後、ラディカルフェミニストによる参政権否定発言が生まれた。男性たちが徴兵カードを燃やしたのに対抗し、女性たちは有権者登録カードを燃やして、新左翼男性からの決別の儀式とし、女性問題第一を掲げるようになった。ニューヨークラディカルウイメンは新左翼政治優先か女性問題優先かという論争を繰り返し、

設立からわずか1年で分裂した。しかし、分裂後も組織自体は存続し、新左翼政治重視派が、女性は大企業から消費者として抑圧されていると論じると、女性問題優先派は、「男性支配」を掲げ、女性抑圧は資本主義システムに還元されないと議論の応酬を繰り返した。

2, レッドストッキングズ (Redstockings)

ニューヨクラディカルウイメンは、参加者の多くが既婚者であり、「男性嫌悪」者ではないことを強調した。CRの際にも、異性愛を自明のこととした。しかし、まもなく組織は新左翼に親和的な女性と女性問題重視を掲げるプロウマンラインを支持する女性とに分裂し、1969年2月に女性解放を第一とし、プロウマンラインを採るフェミニストによりレッドストッキングズが生まれた。中心となる会員は、エレン・ウィルズ、シュラミス・ファイアストーン、キャシー・サラチャイルドなどであり、さらにこの年の春にはロス・X、バーバラ・レオン (Barbara Leon)、アリックス・ケイツ・シュールマン (Alix Kates Shulman) らも加わった。

組織設立のきっかけとなったのは一つの公聴会であった。ニューヨーク州では、特殊なケースのみに中絶が認められるという条件付き中絶法があった。1969年2月13日、ニューヨーク州の中絶改革に関する公聴会において、男性のみからなる委員会に対し、女性グループが現行の中絶法を直ちに廃止するよう求めた。⁸ 女性たちの主張は明確であった。中絶問題の専門家は、産む性である女性自身としたのである。女性たちは、自身の非合法の中絶経験を語り合い、女性の証言を求める公聴会の開催を要求したが、拒否された。女性たちは、ある男性上院議員の「女性たちの発言は単に個人の見解にすぎない」との発言に対し、「これは政治的な発言」であると述べた。女性たちは、公聴会において女性が初めて発言したことを成果としたが、この公聴会になだれ込んだ組織こそがレッドストッキングズであった。⁹ スーザン・ブラウンミラー (Susan Brownmiller) は、「委員会は「専門家」の証言に関心があると述べた。「専門家」は14名の男性と1名の女性からなっていた。1名の女性は修道女である。女性たちは、自分たちこそが専門家だと述べた」と記した。エレン・ウィルズは「委員会は女性たちに女性らしく振る舞うよう要請したが、女性たちはそれを無視した」と書いている。¹⁰ レッドストッキングズはこの年の3月に女性解放のための会合をワシントンスクエアで開き、多くの男性も参加して、女性たちによる中絶に関する証言が行われ、女性を中絶の専門家とした。¹¹

レッドストッキングズ設立後初の日曜日の集会参加への呼びかけの手紙には、教育の機会均等、家事労働の廃止、女性による自由な演説の実現、中絶と身体の自己決定権の確立、法律、習慣、諸組織において女性が完全な人権を得ること、これらを阻む障害を取り除くことが目標として記された。また、1969年に出された中絶カウンセリング情報の中には、中絶ができる日本、メキシコ、プエルトリコなどの国々への渡航方法も記されている。中絶合法化のために活動する組織として、NOWの地方支部を紹介している。このように、初期において、レッドストッキングズは中絶のための具体的な情報を提供し、また、合法化のための行動をNOWなどリベラルフェミニズム組織とともにいった。

一方、レッドストッキングズは男性との協調主義を完全に否定した。「すべての男性は抑圧者であり、あらゆる特権を享受している。すべての女性は抑圧された階級であり、レッドストッキングズはすべての女性の経験を同一のものとし、階級、人種、教育、特権など女性間を隔てるものは取り除く」で始まる宣言はその後、男性嫌悪の思想と分離主義を打ち出す源となった。¹² パメラ・キーロン (Pamela Kearon) は、男性が女性を嫌悪しているのに、女性が男性を愛する必要はなく、愛によって

抑圧は解消されないと説いた。男性を理解しようとするのは、女性の悪しき性格によるのであり、女性自身を解放するために、女性が犠牲にならないための方策を練ることこそ肝要とした。¹³ パトリシア・マイナルディ (Patricia Mainardi) は、家事労働は本来、男女が共通に担うべき労働であり、「参加型民主主義は家庭から始まる」とし、男性は家庭に召使いを持ち、マーティン・ルーサー・キング (Martin Luther King) 牧師の妻も召使いであると述べ、家事労働の政治性、男性による抑圧が顕著に現れる場としての家庭を強調した。¹⁴ エレン・ウィルズは、社会とメディアが女性を消費者とし、商品を販売するための受け身の性的対象と位置づけているとし、消費主義は性差別主義に他ならないと論じた。ウィルズはラディカルフェミニズムの運動は男性らしさ、女性らしさの定義を変え、社会を再構築するために必要であるし、「男性支配」があらゆる社会の側面に行き渡っている現状の中で、男女の関係は主人と奴隷の関係であると指摘し、個々人ではなく、集団で現状を打破する新しいフェミニズムを組織する重要性を説いた。その一方で、彼女は「ラディカルな男性よりはるかに NOW の女性たちのほうが、自分たちと共通の問題を抱え、共に闘っていることを理解し、ラディカルフェミニストとリベラルフェミニストの連携をさらにはかること、自由の要求の中には資本主義反対もあるが、家父長制の崩壊が大事であること」を挙げ、男性支配を第一の標的とした。¹⁵

ファイアーストーン、ウィルズは結婚、家族そのものを女性抑圧の元凶とした。また、ティ=グレイス・アトキンソン (Ti-Grace Atkinson)、パメラ・キーロンはプロウーマンラインを強調し、異性愛至上主義に踏み込んで批判を展開した。彼女たちは、ファイアーストーンとウィルズが組織を独占していることも批判した。労働者階級のフェミニストたちは、ファイアーストーン、ウィルズが常に理論を書き、自分たちはタイプライティングなど低い役割を担っていると批判した。セレスティン・ウェア (Cellestine Ware) (アフリカ系女性、ニューヨークラディカルフェミニズムの創始者の一人) は、CR において他の会員の意見にコメントさえできなかったと回想している。1969 年春から 1970 年秋の解散時まで組織内部は、具体的な社会活動重視派とプロウーマンラインを理論として掲げる CR 重視派とに分裂し、緊張が続いた。

レッドストッキングズはフェミニスト政治の実践よりもむしろラディカルフェミニズムの理論構築において大きな貢献をしたと言えよう。マルクス主義の男性中心主義を否定しながらも、階級分析理論を運用することで女性を抑圧された階級と位置づけた。ニューヨークラディカルウイメンにおいては問題とされなかった結婚を問題視した。問題解決の手段を個々人の努力に求めず、集団的行動におき、その中で CR を重視した。これらの方針はその宣言 (Redstockings Manifesto) に現れている。また、ニューヨークラディカルウイメンによる *Notes From the First Year* の 1 年後に発行された *Notes From the Second Year* はレッドストッキングズのラディカルフェミニズムの思想と戦略を示す歴史資料となっている。初期のラディカルフェミニズムの二つの組織は「姉妹たちは力強い」「個人的なことは政治」という標語を掲げ、CR を行い、ミスアメリカコンテストに反対し、家事労働を政治化し、プロウーマンラインを生んだ。一方、組織内部には常に内部紛争があり、とくに新左翼との関係、結婚の是非をめぐる対立が続いた。掲げられた標語とは裏腹に、組織の団結は弱く、分裂を繰り返した。プロウーマンラインに欠落していたのは、人種、階級の視点である。すべての女性の経験を同一のものとしたが、組織の構成員は圧倒的に中産階級の白人女性であった。さらに、プロウーマンラインのフェミニストたち、キャシー・サラチャイルド、バーバラ・レオンらはレズビアニズムが登場すると、レズビアニズムは個人的な問題解決であり、あくまでもラディカルフェミニズム

は問題への集団的な対峙を行わなければならないとし、レズビアニズムは男性支配と同じ構図を持っていると批判した。ほとんどのレッドストッキングズの女性たちは、異性愛者であった。

3, ザ・フェミニスト (The Feminists)

ザ・フェミニストは、ニューヨクラディカルウイメンとレッドストッキングズがあいまいにしていた結婚とセクシュアリティの問題を具体的に取り上げ、既婚女性の参加資格を限定し、異性愛主義を批判し、会員のリーダーシップを否定し、全員参加型の組織構築をめざした。だが、それにより運動と思想が過激化し、分裂を招いた。リーダーシップを否定したものの、実質的にはティ=グレイス・アトキンソンが実権を握っていた。彼女はリーダーを持たない参加型組織を作るために規則を設け、会員を縛った。アトキンソンは、1967年、コロンビア大学政治思想専攻の大学院生のときに、28歳でNOWに参加し、同年12月にNOWのニューヨーク支部長に選出された。1968年のコロンビア大学のストライキ以来、アトキンソンは自身のフェミニズム思想も急進化させた。そして、NOWが中絶、結婚、家族制度の問題を扱っていないと考え、NOWの組織変革を試みた。しかし、NOWの重鎮、ベティ・フリーダン (Betty Friedan) はアトキンソンのラディカルな行動を批判し、彼女がNOWに提出した、会員から男性を排除する案に反対した。

1968年10月17日、アトキンソンはNOWに参加型民主主義を提言し、役員選出をくじ引きで決めるよう提案した。権力を取り除くことは男女間、人種間、女性間、階級間、あらゆる場で必要であるとアトキンソンは考えた。NOWのニューヨーク支部は、アトキンソンの考えに沿って新しい規約を作ろうとしたが、動議は2対1で否決された。「待遇の不平等の問題は女性の問題の最も基本的なことである。(NOW内部の) 抑圧者の地位を埋めることによって抑圧はなくなる。内部から抑圧と闘うことはできない。ここから退く以外にない」とアトキンソンは述べた。ベティ・フリーダンが「私は女性を権力のある地位につけたい」と述べたのに対し、アトキンソンは「私たちは権力のある地位を壊したい……権力のある地位に上り詰めるのではなく」と語った。この動きは10月17日運動と呼ばれ、ザ・フェミニストの創設に繋がる動きとなった。同日、ニューヨーク市において、いくつかのフェミニストグループが集まり、ラディカルフェミニズムの運動をスタートさせることが決められ、翌1969年6月に女性を抑圧された階級とする分析を基軸に行動すべくザ・フェミニストが結成された。女性抑圧の原因は結婚にあることが合意された。運動の成功のために、すべての会員が規律を守り、自己責任を持つことも明記された。

設立宣言には「フェミニズムの政治理論に基づく新しい」組織を設立し、「女性の階級としての不平等な状況を取り除くこと」を目標とすると記され、性別役割システムは階級制であるとし、権力を持つ抑圧者の男性が権力を持たない被抑圧者の女性から人間性を奪うシステムを分析するとされた。また、家庭、愛、性における役割分担、権力関係を政治的なものと認識し、これを廃止するために行動する組織であるとした。規約には個人への課題と出席の義務が書かれ、女性解放のためには規律を守ることが重要であると書かれた。会員の除名には参加者の三分の二の賛成を必要とし、この件の審議にあたっては10日前に会員全員に通知する旨、明記された。会員は平等であるとしたため、全員が革命的仕事のために必要な技術を持たなければならないとされ、会は会員をサポートすること、会員は会に記事やスピーチなどを提出する義務があるとされた。会合への参加にあたり、会員にはフェミニズム思想の分析などの課題が出された。個人は平等な責任があるとされ、参加が強制された。

一ヵ月に四分の一の欠席により、投票資格が喪失すること、これを回復するには三ヵ月の出席が必要であることも決した。¹⁶

会員の仕事と役割は権力の平等化の原則のもと、すべてくじ引きで決められた。アン・コエト (Anne Koedt) ら何人かはこの規約に反対したという。ザ・フェミニストは制度としての結婚とその実践を否定したので、三分の一以上の会員は結婚または、同棲をしてはならないという規約を決議した。しかし、この決議は会員の反発を生み、コエトら多くの重要な会員が脱会した。彼女たちは、規約は結婚を攻撃するより、既婚女性を攻撃しており、誤った攻撃になっているとした。一方、パメラ・キーロンは「結婚は男性への忠誠であり、女性の一体化と信頼を築かなければならない」と論じた。¹⁷ アトキンソンは「女性の階級意識は男性から決別したときに築かれる。すべての男性との関係は女性にとって危険である」とし、運動が革命的であるとアピールするために男性に依存する女性のイメージを一掃しようとした。そして、彼女自身は、公的な場で男性と席を同じくすることをも拒否した。エコルズはアトキンソンがザ・フェミニストを最もラディカルな組織であると印象づけようとしたが、失敗したとし、分担制を採用したことで組織はファシズムに向かったと論じている。¹⁸

1969年9月23日、5名の会員がニューヨーク市庁舎内の結婚登録局へ出かけ、そこにいた女性たちにリーフレットを配布したが、そこには「結婚は合法的なレイプであるか」と書かれていた。これは、非合法的な中絶に手を染めた獄中のナサン・ラパポート (Nathan Rappaport) 医師への支援に次いで、ザ・フェミニストが行った具体的な行動として知られる。¹⁹ 1969年11月、NOWは地域会議において、「女性を統合する議会」(Congress to Unite Women) の召集を決め、1969年11月21日から23日まで、NOWの主導でニューヨーク市にリベラル、ラディカルを含む15団体、25支部から500名のフェミニストたちが結集した。会議において、すべての女性の解放が告げられ、「女性のためによいこと」を行うと誓われた。無料の24時間保育の実現、デイケアセンター設立、性別に関わりなく共通の教育を受けるための制度改正、教育機関が公民権法第7条を遵守し、強制すること、教育機関に託児所を設置すること、すべての大学に女性学のプログラムを開設することなどが掲げられた。また、すべての女性は抑圧されているが、女性間にも階級格差があるとし、女性の私生活も政治問題であるとした。さらに、性別役割の否定、中絶の権利が書かれ、平等権修正 (Equal Right Amendment 略称 ERA) は最重要課題であること、女性解放が中産階級白人女性の問題とされている限り、解決はないと書かれた。²⁰ このとき、ラディカルフェミニストたちはリベラルフェミニストたちと手を携え、共通目標を掲げ、CRを活用するなどの手段を用い、女性解放のために動いた。ところが、ザ・フェミニストはもともと準備委員会のメンバーであったにもかかわらず、抽選制を求めたという理由から参加を拒否された。1969年秋から冬にかけて、ザ・フェミニストは平等に討論に参加するために発言権を制限する手段としてディスクシステムを採用した。会合のはじめにメンバーが発言するときに、あらかじめ配られた番号付きのディスクを投げ、手持ちのディスクがなくなると発言権もなくなった。さらに、「プロウーマンラインの危険性と意識覚醒運動」を決議し、変革こそ必要であるとの総括のもと、プロウーマンラインは男性を性的対象として必要とするものであるとし、男女の関係そのものを批判していないとした。²¹

1970年4月1日にザ・フェミニストはアトキンソン一人が組織のリーダーのような形でメディアに出ることを許されている状況を批判する決議を採択した。「メディアへのコンタクトもくじ引きで決めるべきであり、メディアに出る場合も個人名ではなく団体名で登場すべき」と決議された。²² こ

の結果、アトキンソンはこの決議に賛成できないとし、組織が決議を取り下げるか、彼女の退会を決めるかのどちらかであると書き、退会した。²³ アトキンソンの退会后、ザ・フェミニストは規則をさらに強化し、遅刻、余談、集会前後の飲酒を禁じた。私生活、健康に関しても規則が作られた。組織の中心となったバーバラ・メルホフ (Barbara Mehrhof) とシェイラ・クロナン (Sheila Cronan) は「男性の興隆」と題する論文を書き、男女関係は政治的なものであり、男性は権力を持ち、女性は持たないとし、「母性、結婚、売春は男性を支える組織であり、結婚は男性の性欲に奉仕するための組織である」とし、女性のセクシュアリティをむしろ否定することにより、解放を得る言説を強化した。²⁴ 1971年後半になると、すべての既婚女性から会員資格が剥奪された。これは、理論と実践の統合であるから有効であるとされた。アトキンソンは1970年に「姉妹の絆は力強い。それは姉妹たちを殺す」と述べ、フェミニズムが精神主義に陥ることを警戒した。組織はライフスタイルと思想を同一視し、しだいに、ライフスタイルの変化を政治的行動に置き換えた。エコルズは、アトキンソンの退会后、ザ・フェミニストはカウンターカルチャーを形成する組織になり、その後、神秘主義、母性主義的傾向を深め、文化フェミニズムへと後退したとし、また、その分離主義的な思想はレズビアンフェミニズム思想を生み出す基礎になったと論じている。²⁵

4, ニューヨークラディカルフェミニスト (New York Radical Feminists)

1969年10月以降、より大衆的なフェミニズム運動を形成しようとする動きがニューヨーク市で活発になり、5人の女性の間で組織の結成が決められ、11月に7名の女性が発起人となってニューヨークラディカルフェミニストが発足した。当時、ニューヨーク市だけでも数千人の女性たちがラディカルフェミニズム運動に参加していたという。²⁶ レッドストッキングズがCRを中心とし、プロウマンラインを採ったために、大規模な運動に発展しなかった反省をふまえて、ファイアーストーンはコエトとともに「大衆レベルのラディカルフェミニズム」運動創設を会の規約に挙げた。コエトがグループの宣言を書き、ファイアーストーンが規約を書いた。ニューヨークラディカルフェミニストは次のような哲学を掲げ、出発した。「ラディカルフェミニズムは女性の抑圧が根本的な政治的抑圧であることを認め、その中で女性たちは、性別にもとづき、低い階級に置かれていることを認める。ラディカルフェミニズムの目的は、この性別階級制度を打破するために政治的に組織化することにある。」²⁷ 12月5日、宣言が完成し、ウェストヴィレッジにグループの拠点が置かれ、グレイス・パレイ (Grace Paley)、スーザン・ブラウンミラー、サリー・ケンプトン (Sally Kempton)、アリックス・ケイツ・シュールマン、ヴィヴィアン・ゴーニック (Vivian Gornick) らが集結した。宣言は「エゴの政治」と題され、男性支配の心理的分析を行うものであり、女性は男性のエゴに奉仕するように作られているとされた。ザ・フェミニストの硬直化した規則への反省から、会への欠席を可能にし、会員の二分の一の参加をもって会の議決ができると決した。ファイアーストーンはまず、全体を統括する組織を作り、効果的に運営することを提案した。そして、最初の3ヵ月間をCRに費やし、次の3ヵ月間をフェミニズムの文献の読書と討論に費やすこととした。ニューヨークラディカルフェミニストはフェミニズムの歴史教育、政治教育も目的とした。とはいえ、すべての会員が教育活動に熱心であったわけではない。スーザン・ブラウンミラーは、このシステムはフェミニストという高処にいる人たちが他の女性たちを支配するシステムであったと述べている。

ニューヨークラディカルフェミニストの運動が最も世間の注目を浴びたのは、1970年3月18日の

「レディース・ホーム・ジャーナル社前座り込み」事件のときである。参加者は、ニューヨークラディカルフェミニスト、レッドストッキングズ、ザ・フェミニストなどの女性たちであった。彼女たちは、レディース・ホーム・ジャーナル誌のスタッフはすべて女性でなければならないと主張し、多くのメディアがこの事件を大々的に報じた。ブラウンミラーはこの件を次のように書いた。「1970年3月18日、私たち200名がレディース・ホーム・ジャーナル社へ予告なしに進入した。たくさんの言うべきことがあり、12時間座り込んだ。雑誌の編集内容に不満があった。……たとえば、託児所を設けることを記事にすること、またアフリカ系のスタッフを雇うこと、女性誌のスタッフはすべて女性であるべきことなどを要求した。……私たちは『政治的路線』を要求したのではなく、質問した。」²⁸ ニューヨークタイムズ、ワシントンポストは翌19日にこの事件を取り上げ、ウイメンズウェアデイリーは「私たちは今日まで沈黙するマジョリティーであった。すべての人たちに知らせる。ボスたちに、夫たちに、編集者たちに、映画製作者たちに、そして男性に。沈黙は終わり、今、革命が始まると知らせる」と書いた。²⁹ レディース・ホーム・ジャーナル誌の編集長のカーター（Carter）は、ファイアーストーンの申し出にやむなく応じたが、女性の代表12名とのみ会談すると伝えた。14項目の要求のうち1項目のみが認められ、抗議した女性たちの声明が誌上に掲載されることになった。レディース・ホーム・ジャーナル誌は8月、女性代表とカーター間の約束どおりに、「新しいフェミニズム」と題する8ページの記事をカーターの署名入りで掲載した。そこには、女性の低賃金労働への囲い込み、教育問題、求人広告の性別記載、女性間で外見により差別が生じること、愛と性について、CRグループの結成方法などが書かれている。この座り込みデモに対しては賛否両論があった。女性たちがメディアに利用されているとする抗議、カーターがデモを書くことで利益を得ているとする抗議、そもそもデモがエリート主義であったとする批判もあった。³⁰

1970年の夏になると組織内に緊張が高まった。抗争の原因はエリート主義批判と組織内の権力関係にあった。ファイアーストーンは内部抗争に疲れ果てた末に退会し、新左翼内の女性差別を批判する一方で、「ラディカルフェミニズムは新左翼の革命思想が革命的すぎるから批判するのではなく、十分に革命的ではないために批判する」とした。その後、彼女自身は「フェミニスト社会主義」をめざした。³¹ 1970年の内部抗争以後、組織の性格は変化し、1971年になると、ニューズレターに女性の健康を扱う記事が増えた。ブラウンミラーはレイプ、ポルノグラフィー、中絶などの議論を中心に扱い、ポルノを掲載したすべての新聞の購入をボイコットせよと叫び、行動し、レイプに対抗するために護身術を身につけることを説いた。1971年7月16日から18日にかけて、コロンビア大学で開かれた「女性が全国中絶キャンペーンに取りかかる」会議をブラウンミラーとコエトは批判し、会議は青年社会主義連盟と社会主義労働党が企画したもので、女性解放運動からはほど遠く、かつ、この会議は中絶問題の一点に焦点を絞ったものであり、女性の身体の自己決定権と完全な性と再生産の自由の双方にまで視野が及んでいないと書いた。³²

おわりに ラディカルフェミニズムの衰退と評価

ラディカルフェミニズムは1970年代になると、中絶、レイプ、ポルノグラフィーの問題、女性の身体の問題にその関心を集中させた。一方、1960年代の終わりから1970年代のはじめに、レズビアンニズムを巡り、フェミニズムは二分された。NOWのベティー・フリーダンは1971年、レズビアン支持宣言を総会に提出するまでの間、レズビアンフェミニストを支持しなかった。すでに、1969年

に NOW が組織した「女性を統合する議会」において、レズビアンフェミニストのジュディス・ブラウン (Judith Brown) は NOW のホモホーピアを強く批判した。1970 年 5 月 1 日に開催された「第二回女性を統合する議会」において、「ラベンダー脅威: ゲイ解放前戦の女性とラディカルレズビアン」による宣言文が示され、さらに、ラディカルレズビアンがポジションペーパーを提出し、会場に配布した。彼女たちはレズビアニズムについて、性的なもののみを意味するものではないとして、フェミニズムとレズビアニズムを統合することを要求した。「女性と同一視する女性」(Women-Identified Women) は政治的な語句となった。1970 年から 1972 年にかけて、レズビアンと異性愛者のフェミニストの分離が生じた。

アリス・エコルズは、ラディカルフェミニズムの運動を総括し、その衰退について分析する中で、その成果として 1970 年のニューヨーク州の中絶法改正、同年の「女性の平等のためのストライキ」、72 年の ERA の連邦議会通過、73 年の中絶合法化として知られる「ロウ対ウェイド判決」を挙げながらも、1973 年には運動は内部抗争により明らかに衰退したとし、その原因として、エリート主義、中産階級中心、姉妹間の協調のなさを挙げた。エコルズは、1973 年以降、リベラルフェミニズムが視野を広げ、CR を実践し、ベティ・フリーダンの性役割の見直しは男性の利益にもかなうと論じた点を評価する。他方、ザ・フェミニストは、1970 年に ERA に反対し、ファイアストーンは託児所建設にも反対したとする。³³ しかしながら、1972 年以降、ラディカルフェミニストとリベラルフェミニストはともに家事労働に賃金を与えよとの論争に加わった。キャシー・サラチャイルドは「家族賃金」が問題なのは、それが家父長制を強化するからであると指摘し、男性に家族のための社会保障のすべてを与える「社会的賃金」の考え方に疑義を唱えた。NOW とラディカルフェミニストは、女性の労働権を求め、女性差別的施策にはともに反対した。³⁴ サラチャイルドは 1972 年の ERA 反対の立場から転じ、1978 年 10 月 3 日に連邦上院宛に ERA の批准期間の延長を求める文書を送った。第二波フェミニズム運動の当初から、リベラル、ラディカル両者は対決しつつも、ミスコンテスト反対、女性を統合する議会などにおいて共闘し、中絶合法化以前に中絶に関する情報を女性に提供した。エコルズはラディカルフェミニストと新左翼との親和性をより重視し、リベラルフェミニストとの接点を過小評価しているのではないだろうか。

1975 年頃になると、中産階級白人中心のフェミニズム運動にアフリカ系アメリカ人フェミニストが怒りを爆発させ、フェミニズムにおいて、再び人種が焦点となった。1980 年代には、女性の経験が人種、階級により異なるとする多文化主義の視点が 1960 年代後半から 1970 年代初頭のラディカルフェミニズムの運動の白人性を照射した。サラチャイルドは 1983 年になって、60 年代フェミニズムを振り返り、「私のラディカルな考え方は決定的に間違っていた」と述べ、その理由を白人性に求めた。そして、公民権運動こそが、初期のフェミニズム運動の引き金となったと述べた。彼女は 1965 年のミシシッピの夏の経験を回想し、学生非暴力調整委員会 (Student Nonviolent Coordinating Committee 略称 SNCC) の重要課題の一つが女性解放であったとし、フェミニズムと公民権運動の親和性を強調し、「男性支配的新左翼」を名指して否定し、フェミニズム発生の自らの理論を覆した。³⁵ 中産階級白人によるフェミニズムはその後、90 年代のアイデンティティ・ポリティクスを経てアフリカ系アメリカ人、ヒスパニック、アジア系の有色の女性たちから批判され、階級、民族、人種などの要素が複雑に交錯する複合的な差別へと視点が拡大された。その過程で、ラディカルフェミニズムが主張したヘテロセクシズム批判はアメリカ社会に定着した。さらに、ラディカルフェミニズムが提

起した「身体の政治」は女性の身体が政治的意味を持つことを暴き出し、女性と健康問題に関する運動は、1980年代に女性のためのブックストアなどの施設拡充として発展した。ボストンの女性解放組織 Women's Health Book Collective は『私たちの身体・私たち自身』(*Our Bodies, Ourselves*) を1970年に出版し、女性解放運動に女性の身体の解放を位置づけ、新たな視点を切り開いた。医学と女性の政治の双方の発展に寄与したこの著作は版を重ね、2005年の最新版に至る。アリス・エコルズは1975年頃にラディカルフェミニズムに代わって登場した本質主義にもとづく母性主義、平和主義、精神性の強調を基盤とする文化フェミニズムは新左翼を否定し、さらに国家権力そのものを否定したと論じた。ラディカルフェミニズムが文化フェミニズムに変容し、後退したとするエコルズの論述はラディカルフェミニズムを1960年代運動史に位置づける見方である。しかし、多くのラディカルフェミニストが1980年代以降も自らを文化フェミニストではなく、ラディカルフェミニストと称していたことから、さらに、ラディカルフェミニストたちが必ずしも本質主義的言説を展開したのではなく、男女がともに社会的に構築された存在であるとするジェンダー概念をも提起していることから、ラディカルフェミニズムの運動を1960年代運動に限定する見方には限界があるだろう。ラディカルフェミニズムを第一波フェミニズム運動から1990年代の第三波フェミニズム運動に連なるフェミニズム運動史の中に組み込んで読むことで、ラディカルフェミニズムが1973年頃に終焉したとするのではなくむしろ、多様に変化し、その中でジェンダー概念を生み出し、ジェンダー史を切り開く可能性を秘めた運動であり、思想であったことが明らかになるだろう。³⁶

註

- 1, Echols, Alice *Daring to Be Bad: Radical Feminism in America 1967-1975* Minneapolis MN: University of Minnesota Press 1989
Echols, Alice *Shaky Ground: The Sixties and Its Aftershocks* New York: Columbia University Press 2002
- 2, Crow, Barbara A. ed. *Radical Feminism: A Documentary Reader* New York: New York University Press 2000
Bell, Diane and Klein, Renate eds. *Radically Speaking: Feminism Reclaimed* North Melbourne Australia: Spinifex Press 1997
Douglas, Carol Anne *Love and Politics: Radical Feminist & Lesbian Theories* San Francisco CA: ism press inc. 1990
- 3, Shulamith Firestone "The Jeannette Rankin Brigade: Woman Power?" Shulamith Firestone ed. *Notes From the First Year: Women's Liberation* New York: New York Radical Women June 1968 pp 18-19
- 4, WSP は、母性主義を平和運動の論拠としつつも、1969年になると人種、貧困、福祉の問題を論じ、ニューヨーク支部はブラックパンサー党を支持した。WSP はオールドレフトからの影響も受け、会員の中にはフェミニストも多く存在した。この点についてファイアストーンは認識していない。
- 5, Brownmiller, Susan *In Our Time: Memoir of A Revolution* New York: Delta Book Dell Publishing 1999 p 37
- 6, Carol Hanisch "What can be Learned: A Critique of the Miss America Protest" November 27 1969 *Notes From the Second Year* p 87
- 7, Eileen Klehr "sds recognizes xx: At National Council Meeting (NC)" *Voices of the Women's*

- Liberation Movement No 5* January 1969 *New Left Note* December 23 1968 から転載
- 8, *Newsday* February 14 1969, *New York Times* February 14 1969, *Daily News* February 14 1969
 - 9, *New Yorker* February 22 1969
 - 10, Ellen Willis “Up from Radicalism: A Feminist Journal.” *US Magazine* October 1969 p 4
 - 11, Susan Brownmiller “Everywoman’s Abortions: ‘The Oppressor Is Man’” *Village Voice* March 27 1969 *Redstockings Women’s Liberation Archives for Action Packet* p 9
 - 12, Morgan, Robin ed. *Sisterhood is Powerful: An Anthology of Writings From The Women’s Liberation Movement* New York: Vintage Books 1970 pp 598-601
 - 13, Pamela Kearon “Man-Hating” (Dolores Bancowski Collection M43 Box 1 Schlesinger Library), also in *Notes From the Second Year* June 27 1969, and in *Redstockings First Literature List and a Sampling of Its Materials* 1989 pp 12-13
 - 14, Patricia Mainardi “The Politics of Housework” *Notes From the Second Year* pp 14-17 also in Crow ed. *Radical Feminism: A Documentary Reader* pp 525-529
 - 15, Ellen Willis “Consumerism and Women” 1969 *Redstockings First Literature List and a Sampling of Its Materials* 1989 pp 19-23
Ellen Willis “Women and the Left” *Notes From the Second Year* 1969, also in *Redstockings First Literature List and a Sampling of Its Materials* 1989 p 29, and in Crow ed. *Radical Feminism* pp 513-515
 - 16, “The Feminists Organizational Principles and Structures” 1969 (Dolores Bancowski Collection M-43 Box 1 Schlesinger Library)
 - 17, Pamela Kearon “Rules and Responsibility in a Leaderless Revolutionary (Feminist) Group” October 1969 (Dolores Bancowski Collection M-43 Box 1 Schlesinger Library)
 - 18, Echols, Alice *Daring to Be Bad* p 179
 - 19, *Sisterhood is Powerful* pp 601-612
“The Feminists Organizational Principles and Structures” 1969 (Dolores Bancowski Collection M-43 Box 1 Schlesinger Library)
 - 20, “Congress to Unite Women” 1969 (Susan Brownmiller Collection MC 523 Box 30 Schlesinger Library)
 - 21, “Dangers in the Pro-Woman Line and Consciousness-Raising” December 1969 (Dolores Bancowski Collection M-43 Box 1 Schlesinger Library)
 - 22, “Declaration of the Feminists” 1970 (Dolores Bancowski Collection M-43 Box 2 Schlesinger Library)
 - 23, “Re-Statement of Ti-Grace Atkinson of April 1 1970 in response to Resolution passed in March 29” 1970 (Dolores Bancowski Collection M-43 Box 2 Schlesinger Library)
 - 24, Barbara Mehrhof and Sheila Cronan “The Rise of Man: The Origins of Women’s Oppression, One View” 1970 (Oravan Collection A 0741 Box 1 Schlesinger Library)
 - 25, Echols, Alice *Daring to Be Bad* pp 182-185
 - 26, Echols, Alice *Daring to Be Bad* p 186
 - 27, “Organizing Principles of New York Radical Feminists” *Notes From the Second Year* December 1969 p 119, *Notes From the Third Year* (Susan Brownmiller Collection MC 523 Schlesinger Library)
 - 28, *New York Times* March 19 1970, *Newsweek* March 30 1970
 - 29, *Women’s Wear Daily* March 19 1970
 - 30, *The Wall Street Journal* August 3 1970 (Susan Brownmiller Collection MC 523 Box 30. 12 Schlesinger Library)

“New Feminism” *Ladies Home Journal* August 31 1970

- 31, Echols, Alice *Daring to Be Bad* p 200
- 32, *New York Radical Feminists News Letter vol.1 no 2.* p 3. July 1971 (Susan Brownmiller Collection MC 523 Box 31 Schlesinger Library)
- 33, Echols, Alice *Daring to Be Bad* pp 197-202
- 34, Kathie Sarachild “Beyond the Family Wage: A Women’s Liberation View of the Social Wage”
Sarachild, Kathie, Brown, Jenny and Coenen, Amy eds. *Women’s Liberation & National Health Care: Confronting the Myth of America: A Redstockings Organizing Packet* 1999 pp 21-29
家事育児を担う女性も労働を行っているとして、その対価を支払うべきであるとの議論は第一波フェミニズムの時代から存在した。たとえば、グリニッジヴィレッジフェミニストのクリスタル・イーストマン、社会主義者で働く母親の権利を唱えたシャーロット・パーキンズ・ギルマンが家事労働に賃金を与えよと論じている。拙著『アメリカの第一波フェミニズム運動史』ドメス出版 2009年 p 236
なお、マリアローザ・ダラ・コスタ（イタリアのラディカルフェミニスト）による「家事労働有償化」論争と運動は1974年に、アメリカ、イギリス、ドイツなどのフェミニストによる「家事労働賃金要求グループ」設立へと結実し、トランスナショナルな展開を見せた。
- 35, Kathie Sarachild “The Sixties Speak to the Eighties” *A Conference on Activism and Social Change Session on Civil Rights and Beyond* October 22 1983
- 36, 運動の初期に、ラディカルフェミニストたちは第一波フェミニズム運動の中でも奴隷制廃止運動と女性参政権運動を抑圧された女性たちが行った極めてラディカルな運動と評価し、スタントン、アンソニーらに代表される初期の女性参政権運動と自分たちの運動を同一視した。(Shulamith Firestone “The Women’s Rights Movement in the U. S.: A New View” *Notes From the First Year* New York Radical Women 1968) 筆者はラディカルフェミニズムの思想は第一波フェミニズム運動のグリニッジヴィレッジフェミニズムやアナキストフェミニズムの「性の政治」を継承していると考え。一方、セクシュアリティの議論において、ラディカルフェミニズムは第一波フェミニズム運動では問われなかった中絶の問題を取り上げ、レズビアンズムを可視化させたことが特徴的である。

* 本論は科学研究費基盤研究 (A) 「1960年代の米国における文化変容とその越境に関する総合研究」の一環として、主に The Schlesinger Library on the History of Women in America (Radcliff Institute Harvard University) で行ったリサーチを基にしたものである。

(くりはら りょうこ 元, 国際学科)